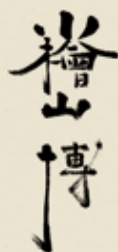
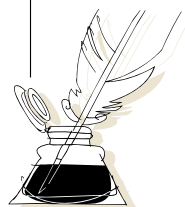


人生讃歌



うたた寝で見た夢



ぼくは夢を見るのが好きである。ただし睡眠中の幻覚みたいな現象のほうではなく、目覚めているときに思い描く実現する見込みのない夢想のほうである。これが楽しい。空想は生まれつきの習癖で、持病である。

しかし先日、散歩に疲れて書斎の椅子でうとうとと眠ついているとき見た夢は面白かった。そこは銀河系の星の楽土という国で、八十六歳のぼくが副大統領で農業大臣を兼務している夢である。食べなければ死ぬ、命とは食べ物のことだと思つてゐるから、こんな愉快な夢を見たのだらう。ぼくが炭焼き小屋で生まれたことや、七十七年間住んでいる北海道を自慢に思う、とても純真な人間だからだと思ふ。

★

さて夢の中だが、とにかくぼくが副大統領兼農業大臣で、大統領は三十九歳の酪農経営で笑顔の美しい女性である。これも嬉しい。ここは主権在民、基本的人権、言論、思想、表現などいくつもの自由を明記。議会は天院と地院の二院で、天地つまり人間の住む世界という理想の名もすばらしい。両院とも議員は三十五人で、国民が直接選挙で選ぶ。議員の内わけは主婦から十五人、漁業関係から二十人、労働関係二十人、

医療二十人、農業人から三十人、林業十人、商工業と会社経営者三十五人、鉄道・運輸十五人、貿易十五人、教育・法律・文化関係二十五人、観光十人となっているが、ほかに十人の自由枠があつて路上生活者など誰でも議員になれる。ただし議員にも大臣にも報酬はなく、逆に議員のほうから毎月、おカネを納めなければならぬ。金額はいくらでもよく、多いほど尊敬されるが、あまり多過ぎると次の選挙で当選したいからだと思われ、国民に次回選挙で間違いなく落とされる。

そしてどの職業の議員も女性が三分の一以上。裁判長は地元の人でなく他の国からの四年ごとの招致も法律化されている。徴農制があり、市民は十八歳から二年間、農業に従事、食べ物について学ぶことが義務づけられている。ただし特別の事情があれば免除されるし、希望すれば十六歳から三十歳までの間に学んでもよい。食料はすべて自給。教育と医療は無料。そのぶん税金は高いが、明快な累進課税だから貧乏人のぼくは助かっている。ちなみに農業人、教師、医師は高収入である。また才能ある経営者はどんどん儲けて社会に還元、国民から敬服されている。

ここで眼がさめて夢が終わった。なんとも具体的な夢でたまたげた。夢のあと、なんで北海道に住む俺がこんな面白い夢を見たのか、思い当たることはある。二十年ほど前、本州の南に住む六十歳の女性が札幌へきて、高層ビルがあつたり道路がアスファルトの舗装でベンツの車が走っているのを見て「札幌つて、こんなに開けてるの？馬車が通つてると思った」と驚いたのを見て、ぼくは体の力が抜けたのだった。また、ぼくの妻は長野県出身で東京に勤めていたときよく結婚、札幌へきて五十四年になる。その妻の中学の同級生で現在長野に住む女性が妻のことを「え？北海道へ行ったの？可哀想！大丈夫か

しら」と言ったというのである。

★

多くの父母は福島県から北海道へきて三十八年間、農業をして六人の子供を育てた。その三男に生まれたぼくは思う。これまでは自然があるから開発してきたが、これからは自然があるから開発するべきでない、と。北海道は夢の大陸だとぼくは思う。すぐれた先住民族が長い間、苦心、努力して築き積み上げてきた、自然と共生した重厚な歴史という財産がある。さらにその延長線上に、先住民の方々とぼくの父母のように本州から食いつばぐれてきたり、壮大な開拓心をもつ



挿絵/中江潤一

た人々との協同による苦闘の成果が現在だ。そしてこの大陸で育ったぼくらには、広大な大地と大森林と大平原、大農地、大雪原、大きな空がある。海はオホーツク海と太平洋、津軽海峡、日本海の四つを持つ。この大自然と風土で大きな夢と大きな希望と自由な精神が育たないはずはない、とぼくの自慢と願望はきりがないのである。

★

北海道の水と空気がおいしい。食べ物の海胆、帆立、烏賊、毛蟹、キンキ、鰾、秋刀魚、紅鮭、イクラ、じゃがいも、メロン、牛乳、お米、玉蜀黍がうまい。ぼくは日本一という言葉が好きである。この北海道の広さも、ぼくの自慢だ。約八万三千四百平方キロで、たとえば本州の東京都、大阪府、神奈川県、京都府、奈良県など十五の都府県を足した広さである。最近の北海道の農産物生産高の全国一の多さは、ぼくが最も誇りにすることだ。ぼくの調べで正確ではないかもしれないが、南瓜、蕎麦、大根、玉葱、人參、玉蜀黍、甜菜、牛蒡、アスパラガス、ブロッコリーは日本一の生産高、お米は新潟に次いで二位。肉用牛飼育数も牛乳生産も全国二位。海産の秋刀魚、帆立貝、鮭類、昆布類も日本一。わが国の食料自給率は三八%で六二%輸入だが、北海道の自給率は二百%と、ぼくは鼻高々だ。

★

書斎の椅子にもたれての夢からさめたとき、窓から夕暮れ近い濃い日光が射し込んでいた。眠っているとき見る夢は現実ばなれした儚い内容が多いから、ぼくの夢もそれだろう。わかつてる。しかし、ま、夢も繰り返して見るとうちに実夢になることだつてあるかもしれないからなと思いつつ深呼吸を一つして立ち上がった。まずは晩酌を飲みながらじつくり待つか、と思う。裏の山で山鳩が鳴きたす。

①